

長野市街地にみられる水環境

石澤 孝
信州大学教育学部

ENVIROMENT OF RIVERS IN NAGANO BUILT-UP AREA

ISHIZAWA Takashi
FACULTY OF EDUCATION, SHINSHU UNIVERSITY

キーワード：環境，河川，長野市街地

Keywords：Enviroment, River, Nagano built-up area

1. 都市にみられる水環境

都市は産業の集積地域であり，また住宅の密集地域でもある。このため，集約的な土地利用が進められる傾向にある。経済の高度成長期には，多くの都市で官公庁や病院，学校などが郊外に移転し，跡地は再開発されて高層オフィスビルが建てられるという光景がみられた¹⁾。経済的価値の低い施設とみなされたからである。

市街地を流れる小河川や点在する井戸も，どちらかというとな経済的価値の低い非経済的な土地利用と位置づけられる。近年，環境保全や居住環境などの視点から市街地における水環境の役割が見直されようとしている。しかしながら，経済の高度成長期には当然のことにさまざまな改変が行われてきたのである。ここでは，長野市街地²⁾を事例として，市街地にみられる水環境の変容を復元し，その実態と課題に近接したい。

2. 水のまち長野における水環境の現状

「長野は水のまちである」という

と，意外に思う市民は少なくはないだろう。なぜなら，市街地周辺の河川として思い浮かべるのは犀川や裾花川であり（図1），近くに諏訪湖のような湖もないからである。

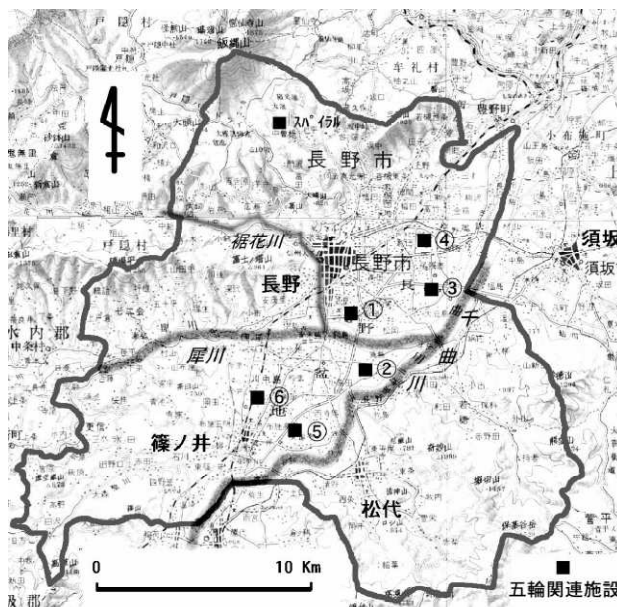


図1 長野市（平成の大合併以前）における主要河川と五輪関係施設

①ビッグハット，②ホワイトリンク，③エムウェーブ，④アクアウィング，⑤五輪スタジアム，⑥選手村（現公営住宅） 石澤（1999）より



図2 長野市街地を流れる小河川
長野市作成の河川図に加筆

ところが、長野市街地の中央部には多くの小河川が流れている（図2）。江戸時代初期に松代藩によって、裾花川の川筋が、現在の県庁付近から南に付け替えられたからわかりにくいですが、この地域は裾花川が形成した扇状地上に位置しており、放射状に東流していた昔の裾花川の流路に沿って多くの小河川がみられるのである。

それらの水源にあたるのが、裾花川から取水された善光寺用水である。その主な水系をみると、まず善光寺用水は長野商業高等学校南付近で鐘鑄川を分水して八幡山王堰となる。この八幡山王堰は長野県庁手前で裾花用水を分水し、さらに県庁西南の

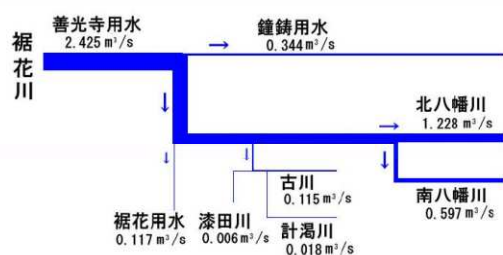


図3 善光寺用水の水系
善光寺用水計画用水系統図より作成



図4 大門町南交差点と鐘鑄川

「しんきん」の看板の下を暗渠になって鐘鑄川が流れている

大口分水で南流する漆田川と山王堰（計渴川，古川）を分水して八幡川となる。八幡川は、信濃毎日新聞社南側で北八幡川と南八幡川に分かれ、ともに東流する。また、鐘鑄川は県庁北付近で中沢川を分水し、ともに東流している（図3）。これらの水系の本流といえる北八幡川には雨水調整池も設けられ、本格的な河川の様相もみせている。

これらの小河川は東西方向に流れているから、長野駅から善光寺に向かって南北に続く中央通りを通れば気がつくはずである。しかしながら、流れを目にすることはない（図4）。暗渠になっている部分が多いからである。どうして、そうってしまったのであろうか。

近年、市街地における小河川の再評価が行われつつあるが、経済の高度成長期においては必ずしもそうではなかったからである。特に、明治期以降急速に拡大した³⁾長野市街地には、かつて農作業に使われた自然発生的な道路がそのまま残り、中央部においても水路に沿った、車も通れない歪狭な道路が多くみられた。このため、住民からの道路拡幅要請や、緊急時における救急車や消防車

の利用という安全性の観点から，行政による拡幅事業が企画された。しかしながら，家々が密集している市街地ではそのための用地を確保することが簡単ではなかった。そこで目をつけられたのが，道路に沿って流れる水路である。

ところで，水源の名称からも察せられるように，これらの小河川は市街地東部に広がる水田などの農地を潤す純然たる農業用水（堰）である。管理者は，善光寺平土地改良区であり，水利権などが絡むので暗渠にすることは簡単ではない。ところが，公共的に利用する場合には比較的簡単に進めることができ，また補償費などの費用も発生しない。このため，道路の拡幅用として，比較的容易に暗渠化が進められてきたのである。

3. 長野における水環境の変遷

暗渠化が進められた経緯を追ってみよう。ところで，行政の事業記録の保存期間は多くの場合5年にとどまるため，近年5年間を除いては工事記録からの把握が難しい。そこでここでは，住宅地図⁴⁾と現地調査を用いての把握を試みることにした。

さて，市街地中央部を流れる小河川は，善光寺方面の北側から鐘鋳川，中沢川，北八幡川，南八幡川の順に，

1924（大正13）年に拡幅された中央通りを横切って流れている。1978年までにこれらの河川では，中央通りに沿った地域をはじめとする多くの部分で暗渠化が図られ，我々が目にすることができなくなっていたのである（図5）。中央通りに近い東側でわずかに残されていた南八幡川の開渠部分は1984年までに暗渠にされ，また信濃毎日新聞社南側の八幡川と武井神社東側および長野地方裁判所南側の鐘鋳川の部分も1995年までには暗渠にされている。長野県信用組合本店北方の北八幡川の一部が遊園地として活用されたのを除くと，多くは道路用地としての暗渠化である。いったん道路として暗渠化されると，再び開渠にすることはたいへんに難しい。道幅が狭くなり，利用する住民の利便性が大きく損なわれてしまうからである。

4. 水環境の保全と課題

長野では，冬季オリンピック（五輪）の開催で多くの農地が市街地に転用された。このため環境への関心がそれまでより高まったこともあり，トイーズの再開発にあわせて北八幡川を開渠にする運動が起こった（図6）。しかしながら，再開発という公的事業にもかかわらず実現には至

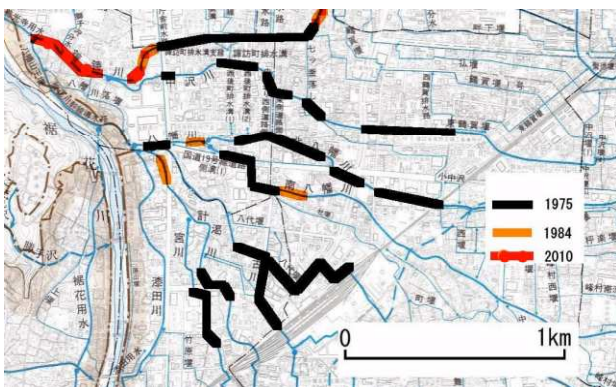


図5 河川の暗渠化の進展

暗渠化された信濃毎日新聞南側の部分は，その後開渠された



図6 トイーズと北八幡川

写真右下の道路の下を北八幡川が流れている



図 7 整地前の鐘鑄川（左）と
暗渠化工事後（上）

らなかった。かように，いったん暗渠にした部分を開渠にするのは難しいことなのである。かろうじて，信濃毎日新聞社の社屋建設にあわせて自転車置き場として利用されていた部分の開渠が実現した。また，幸いにも開渠として残されていた南八幡川の長野大通を挟む両側の部分で，親水公園としての整備が図られている。これらのことは，河川の環境保全のための一筋の光明であり，先鞭をつけるものとして評価したい。



図 8 整地された鐘鑄川分水口

繰り返すが，いったん暗渠にしてしまうとその復元はなかなか難しい。したがって，暗渠化を計画する際には，住民の利便性・安全性と同時に景観形成という観点から，慎重な検討を要さなければならないはずである。

ところが，残念なことに最近，暗渠化により道路になった河川部分がある（図 7・8）。鐘鑄川の，妻科神社南東と南西の部分である。この工事により，河川の景観とともに川のせせらぎを聞く機会が失われてしまったといえる。この事業主体は長野市である。

ところが，隣接する八幡川（八幡山王堰）では，長野県により，景観形成という観点からの整備が進められている。ほぼ同じ時期に同じ水系の河川整備を行いながら，事業主体が異なるというだけで相反する形での整備が進められたということになる。八幡川と同様に，鐘鑄川でも景観形成の観点からの整備ができなかったのか，なぜ事業主体間での調整を行うことができなかったのかと考えると，大変残念なことである。

今後、河川の整備計画を立てる際には、行政間の意思疎通を図りながら、統一的な整備をおこなってもらいたいものだと考える。

注

1) たとえば、長野市街地では日赤病院が犀川に隣接する若里地区に移転し、跡地は農協ビルとして利用された。また、岡田の県立長野工業高等学校も犀北地区に移転し、跡地はバスターミナルや八十二銀行本店などとして利用された。さらに若里にあった農業大学校および農業試験場は、郊外の大室地区を主とする地域に移設され、跡地には県民文化会館が建てられた。このような非経済的とされる施設の郊外移転が、後で問題となる、中心市街地の空洞化の一要因になったことは、皮肉なことである。

2) 「長野」という地名は、「長野県」や「長野市」という自治体の呼称をはじめとして、地域的スケールの異なるさまざまな使い方がされる。また、現長野市域においては、長野のほかに篠ノ井、松代など複数の市街地が立地しているから、前もって定義して用いないと、さらに混乱が生じることになる。ここでは、昭和の大合併で成立した「長野市」域の市街地と定義して、「長野」または「長野市街地」を用いる。

3) 長野市街地の発展については、石澤（1992, 1998, 2003, 2010）を参考にされたい。

4) 入手できた最も古い住宅地図は、高度成長が終わって経済の安定成長期に入った1978年のものである。これをベースに、1984年、1995年の住宅地図を用いて分析をおこなった。

5) 農地の転用については、石澤（1999, 2002）を参考にされたい。

文献

石澤 孝（1992）：都市の成立起源と成長過程－門前町長野と城下町松代の場合－，信州大学教育学部紀要，77号，pp.83－109.

石澤 孝（1998）：『都市の成立と発展』龍鳳書房．

石澤 孝（1999）：『地方都市における都市化と農地の転用』第一住宅建設協会．

石澤 孝（2002）：長野市における冬季五輪開催と農地転用．季刊地理学，64巻，pp.129－138.

石澤 孝（2003）：ながの学ことはじめ－どうする長野．信州と地域，1号，pp.1－28.

石澤 孝（2010）：『まちづくりのための試本－はじめて学ぶ「ながの学ことはじめ」』信州経済地域出版会．

（原稿受付 2011.2.27）